JATS NEWSLETTER 1.3.5.7.9月発行

JUST NOW JATS

CHALLENGE FOR THE FUTURE!

2013-01 No.17

TOPICS

- 新年のご挨拶 …… 1面
- 胸部外科今昔 …… 2面
- 第43回心臓外科学会総会開催にあたり …… 3面
- 理事会ニュース …… 3面
- 女性医師の会 …… 3面
- 胸部外科学会優秀論文賞 …… 4面

特定非営利活動法人 日本胸部外科学会
The Japanese Association for Thoracic Surgery

新年のご挨拶

日本胸部外科学会理事長　坂田 隆造

あけましておめでとうございます。去る12月5日に2013年度第1回理事会を開催し、新理事をまじえて各種委員会構成を確定しました。新たな布陣で理事長としての2年目の活動に邁進する所存でありますので、会員の皆様のさらなるご協力、ご支援をお願いする次第です。

3項目の重点課題

第65回日本胸部外科学会定期学術集会が久留米大学藤田博正会長のもと2012年10月17日～20日に福岡国際会議場で開催され、成功裏に終了しました。改めて藤田博正先生及び久留米大学医学部外科学教室の皆様に心より御礼申し上げます。

この学術集会の理事長講演で、私は3項目の重点課題を提示しました。一番目は専門医制度の質的強化で、修練医の教育を充実させることによって専門医全体の底上げをはかることです。厚生労働省による「専門医制度の在り方検討会」や日本専門医制評価・認定機構の活動などが入り乱れ、日本の専門医制度がどのように形作られるのかまだはっきりとした姿はみえませんが、「在り方検討会」の方は本年3月に最終報告を公表する予定とのことです。仮にこの流れの末に日本の専門医制度全般がある程度の共通規定にのっとって再構成されることがあっても、胸部外科学会の関与する専門医制度、すなわち心臓血管外科、呼吸器外科、食道外科の専門医制度が大きな変更を余儀なくされるような事態はないと思っておりますが、いずれにせよ、我々は関係する専門医の質向上をはかる責務があります。

専門医の質を上げる二つの方法

専門医の質を上げるのには二つの方法があります。一つは専門医の数を絞っていわば少数精鋭部隊とする方法、もう一つは修練医の教育を改善することによって数を維持しつつ全体の底上げを図る方法で、我々が目指すのはもちろん後者の方法です。専門医の在り様は、オリンピックではなく、国民が全国均しく安心・安全の医療を享受できるような医療政策の中核的存在となるべきものであるので、一番である必要はなく、意味もありません。

しかし安心・安全の医療を提供できる専門医を育てるためには、教育の具体的なプログラムを確立し、その実行度と達成度を評価する仕組みが必要です。それぞれの教育施設で適切な診療行為（手術）が行なわれていることが必要不可欠であり、従って各施設の評価と指導が重要な作業となります。関連学会、心臓血管外科専門医認定機構、呼吸器外科専門医合同委員会などと連携して作業を進めていきたいと考えています。

学術調査結果の公開について

2番目は学術調査結果の公開です。本学会では既に1986年以来、学術調査を毎年学会誌に発表し、1996年からは全国平均死亡率も公表しています。これによって本邦の胸部外科手術全般の輪郭（疾患毎の症例数、死亡率、それらの全体像）と推移が明瞭になっただけでなく、各施設、各術者は自らの手術成績と全国平均のそれとを比較できるようになり、いわばフィードバックの形で手術成績の向上に多大の貢献をしてきました。

一方データの解析と公開については学術調査結果の持つポテンシャルからはほど遠いもので、「よい医療施設」を探し求める国民からは公開の拡大要望が近年とみに高まっております。このような状況の中、田林前理事長の強力なリーダーシップのもと、2011年12月に初めて2010年度学術調査の一部が会員の同意が得られる範囲で公開されました。我々としてはかなり理解しづらい不十分な公開形式であると考えていましたが、後のアンケートで会員の大多数からは、主に多くの他施設（施設名は不明ながら）と自施設を症例数や成績で比較できるとの理由で肯定的な回答が寄せられました。リスク評価のされていない手術成績は比較できない、という大原則を踏みはずすことなく公開の明解さを高めていきたいと思います。学術調査データの解析では2005年～2009年の5年間のデータをもとに「胸部外科手術における症例数と結果の関係性について（GTCS. 2012; Vol.60, N10, 625-638）を発表しました。2000年～2004年の5年間データによる数井論文（GTCS. 2007; 55: 483-92）に続くもので、過去との比較で最近の5年間成績はすべてのカテゴリーで向上していました。また小児や新生児の開心術では症例数と手術成績に有意な関係はみられず、成人心臓手術においては症例数の少ない施設間で成績にバラつきがみられ、一定の症例数を超えると成績は同等となり、一定数は手術によって異なりました。食道癌手術、肺癌手術においても同じ傾向がみられました。更に経験ベイズを用いた解析で、平均と比べて死亡率が有意に高い施設数を手術毎に割り出しました。これは症例のハイリスク故のたまたまの結果なのか他に原因があるのか、このような分析をテコに日本全体のレベルアップをはかっていきたいと考えています。

GTCSのIF獲得に目指して

3番目は学会誌の質の向上です。GTCSは日本の学会誌でImpact Factor (IF)を持たない数少ない学会誌でありますが、「日本の医学会を先導する学会」を目指すならば学術集会と学会誌の質の向上が大前提であります。学術集会は総合将来計画委員会や学術集会委員会等によって質の向上がはかられ高レベルの学術集会に変貌してきましたが、学会誌は遅れをとっています。第1回理事会でも一番の課題であることを確認し、会誌編集委員会と力を合わせてGTCSのIF獲得に目指して取り組んでいきたいと決意しております

坂田 隆造
（京都大学大学院医学研究科　器官外科学講座
心臓血管外科学　教授）

1975年3月　京都大学医学部卒業
1975年6月　京都大学医学部第二外科入局
1982年7月　Institut Mediteraneen de Cardiologie, Unite de Chirurgie Cardiovasculaire, Clinique de la Residence du Parc (France)
1984年4月　Centre Medico-chirurgical de la Porte de Choisy Unite de Chirurgie Cardio-vasculaire (France)
1985年6月　社会保険小倉記念病院心臓血管外科（医長）
1988年6月　国家公務員等共済組合連合会熊本中央病院心臓血管外科（医長）
2000年1月　鹿児島大学医学部外科学第二講座教授
2008年8月　京都大学大学院医学研究科器官外科学講座心臓血管外科学教授
2011年4月　京都大学医学部附属病院副院長

趣味：ゴルフ、読書　　好きな言葉：空

胸部外科今昔

―ある研究室の窓から―

名誉会長 内田 雄三

「胸部外科今昔」といえば、「今」については学会発表や論文で、あるいは報道などでその華々しい成果を目の当たりにしている。また今年になってからは、今上天皇、さらに三笠宮様が心臓の手術を受けられたという日本国皇室2000年の歴史上極めて画期的な出来事が報道された。かつて昭和天皇が胃空腸吻合術を受けられた時には、玉体にメスを入れることの是非を巡って議論が続出した。しかしその後は皇室も世間も開明的となり、今上天皇が冠動脈バイパス術を受けられた後、短期日で公務に復帰されたとの報道は世間を大いに驚かせ、われわれ国民を歓喜させた。これは即ち胸部外科の進歩と世間の理解が定着したことを実証したものであり、胸部外科の「今」の一端をまざまざと実感できる出来事であった。

このような「今」の華々しい成果をみるにつけ、心の片隅で、遠い「昔」に何か忘れ物をしているような気がしてならないのに気づいた。その「何か」とは、今から40年も昔の、今ではもう遠い記憶の中で霞んでしまっているある研究室での日々の出来事である。

1967年春、私は長崎大学大学院（病理学専攻）を終了し、長崎大学第一外科に入局した。その当時、病理学（第二）教室（松岡茂教授）では血管病理学を主とした数多くの研究が行われていた。一方、第一外科では、辻 泰邦教授（第31回会長）が教授に昇任されて間もない頃で、教室には新鮮な熱気が溢れ、教室員は夢と希望に燃えていた。私が入局後最初に命じられたことは、1966年に同科で行われた本邦2例目の同種肺移植例の摘出肺の病理学的検索であった。「代用肺」の役割を終えて、術後1週目に摘出された肺の病変は多彩であり、これが拒絶された肺の組織像かと感慨深く見せてもらった。「今」では、同種肺移植術も進歩し、移植された肺は見事に生着し、肺機能を十分に発揮しているようであり、「一時的代用肺」などという概念は完全に過去のものとなった。

このような時代の流れの中で、当時の第一外科の呼吸器班では、富田講師の指導のもとに、肺移植、気管再建術、気管・気管支形成術に関する色々な実験が行われていた。一方、循環器班では、調助教授の指導のもとに、虚血心の外科治療に関する実験的研究が行われていた。私はこれらの種々実験に関する組織標本の検索を一手にまかされるという思いもかけない幸運に恵まれた。

これらの研究の中で、生涯忘れることの出来ない程の苦労と喜びと感動を体験できたのが下田穂積氏によって行われた「虚血心に対するVineberg変法の実験的研究」である。その概要は、犬の心臓で左回旋枝の起始部にameroid constrictorを用いて一定の狭窄を形成して心筋虚血部を作成し、その虚血部位の心筋内に内胸動脈の貫通埋込みを行うという術式であり、その埋込まれた動脈からの新生血管と前下行枝、左回旋枝との間に吻合（交通）が形成されることを血管造影と組織学的手法によって証明するというものであった。病理室の私の机の周りには膨大な量の連続切片標本が山積みされ、連日深夜にまで及ぶほどの時間が費やされた。今思い出しても気が遠くなるような仕事量であったが、下田氏の直向きな熱意に動かされて何とか務めを果すことが出来た。その実験結果は十分に満足できるものであった。その要点は、貫通埋込みする動脈の末端を盲端にせず、灌流形式にすることによって動脈の内膜肥厚を十分に制御することに成功したこと、さらに、埋込み部位の動脈の分枝を切り放したままにし、さらに埋込み部位の動脈に針を用いて約1㎜径の小孔を複数窄つことによって血管新生と既存血管分枝との間の吻合（交通）形成が明らかに促進されることが証明されたことであった。（図、写真）[1]。

このすばらしい成績は必ずや臨床に応用されるものと期待していたが、この期待は遂に実現することはなかった。歴史の流れは急旋回して、冠動脈バイパス術、冠動脈ステント留置術の普及へと向かって行った。このような実験が行われたこと自体が皆の記憶から急速に遠退いて行った。現在の第一外科の人達はもはやあのような実験が同科で行われたことすら知らない人が多いのではなかろうか。私自身すらもが、その後の身のまわりの変化に気を奪われ、そのような研究に携わったことすら忘れてしまっていた。その後（1980年）この実験結果は下田氏によって論文にまとめられ、長崎医学会雑誌[1]（55巻4号、1980）に掲載された。今上天皇の手術を機会に急に思い出してその論文別刷を取り寄せてみた。

頁を捲るとそこには懐かしい図、写真などがあった。組織像の写真などはつい昨日顕微鏡下に見たばかりであるかのような錯覚に陥った。思わず熱いものがこみ上げてきて眼が霞んでしまった。その霞の中の遥か先の方に、あの頃の懐かしい大学の研究室の窓が見えてきた。その窓を覗いてみると、そこには張り切って実験をしている下田氏の姿があり、山積みされた組織標本に囲まれて顕微鏡を覗いている自分の姿があった。当時の若い仲間達の笑い声が聞こえてきた。これこそが私にとっての胸部外科の「昔」そのものであるような気がした。「ガンバランネ、ガンバレバ必ズヨカコツノアルケンネ…」突然辻教授の声が聞こえてきた。急に胸が熱くなって全ての景色が霞んでしまった。

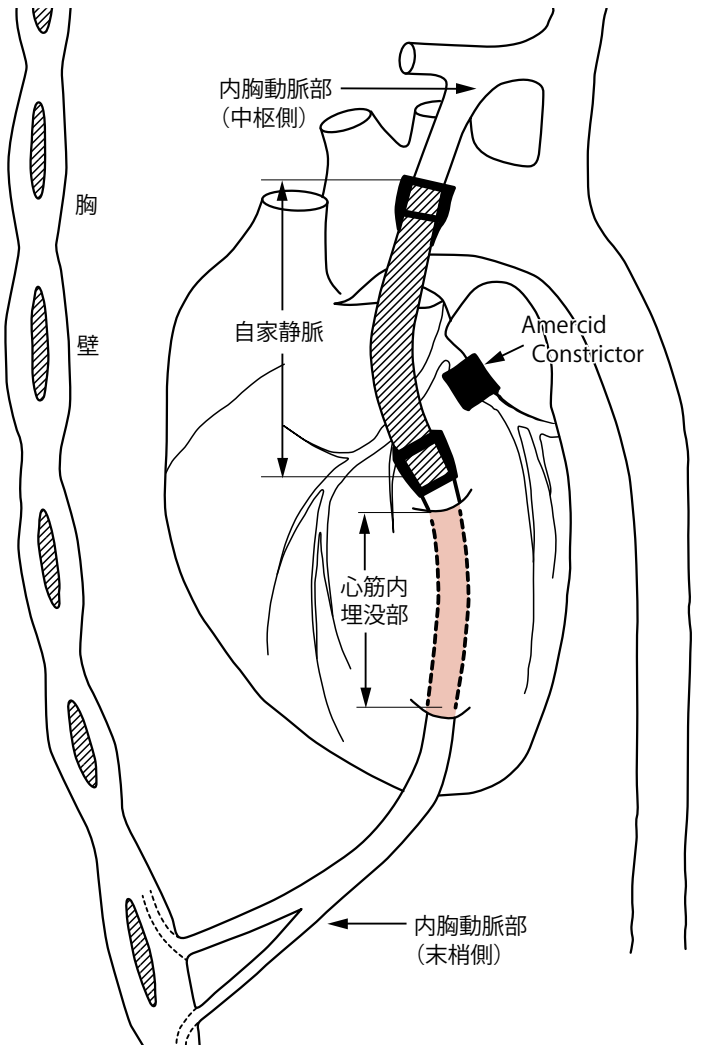
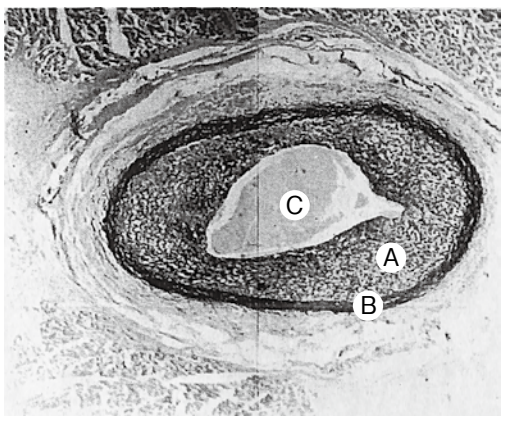
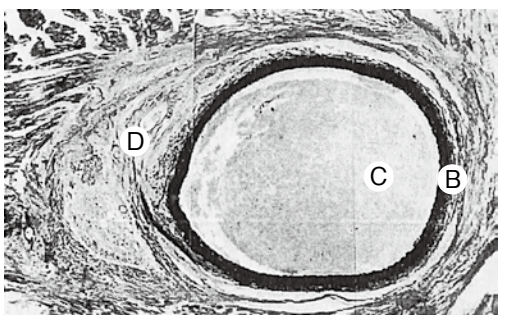


図1 Vineberg変法[1]
心筋内埋没部内胸動脈の血流は維持される（灌流形式）



a）Vineberg 法（30 日目）



b）Vineberg 変法（55 日目）

写真1 心筋内に埋めこまれた動脈の内膜肥厚の比較（Weigert弾性線維染色）[1]。
a：Vineberg法（30日目）
b：Vineberg変法（55日目）
（A）動脈の内膜（肥厚）
（B）中膜
（C）注入されたバリトゲン
（D）周囲の小血管

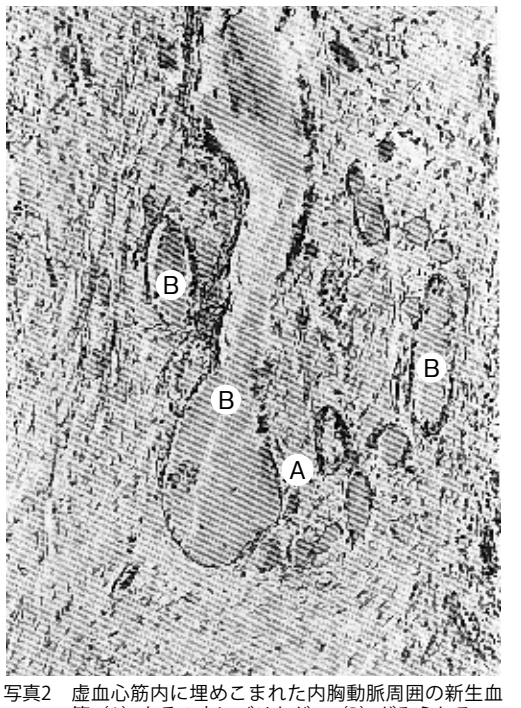


写真2 虚血心筋内に埋めこまれた内胸動脈周囲の新生血管（A）とその中にバリトゲン（B）がみられる。Vineberg変法30日目（Weigert弾性線維染色）[1]

1）引用文献
下田穂積：虚血心に対するVineberg変法の実験的研究。長崎医学会雑誌, 55(4): 467-476, 1980

内田雄三
（大分医科大学名誉教授、第53回日本胸部外科学会会長）

1962年 長崎大学医学部卒業
1967年 長崎大学大学院医学研究科（病理学）終了
1967年 長崎大学第一外科 副手
1968年 同上 助手
1974年 西ドイツ・ミュンスター大学医学部（フンボルト財団奨学研究生として2年間）
1978年 長崎大学第一外科 講師
1979年 大分医科大学外科学（二）助教授
1988年 同上 教授
2003年 大分医科大学名誉教授
2003年 国家公務員共済組合連合会新別府病院顧問
2007年 医療法人社団恵愛会大分中村病院顧問
2008年 大分県外科医会会長
現在に至る

趣味：家庭菜園、読書（医療史、日本古代史）
好きな言葉：耐寒梅花麗

第43回 心臓血管外科学会総会を開催するにあたり

第43回日本心臓血管外科学会学術総会は2013年2月24日大会前日卒後教育セミナーから始まり、27日までの予定で、東京お台場のホテルグランパシフィック LE DAIBAにて開催いたします。テーマは「新・匠の時代 ー知覚し、思考する心臓血管外科医をめざしてー」といたしました。その趣旨は、世の中はエビデンスに基づくマニュアル・ガイドライン時代ですが、マニュアルは最低限の知識と考えます。同じように、ガイドラインに従っていれば間違いないという考え方がありますが、時にはこれを逸脱することもあり得ます。そのため、これからの心臓外科医は、マニュアルは最低限の知識とし、ガイドラインのエビデンスに基づきながらも、自分の五感を信じて、時には第六感をも駆使して、自身の目と耳と手で知覚し、自分の頭で考えて、目の前の患者さんに安全で質の高い治療法を選択する必要があると考えます。今回の学術集会のテーマとして、このような意味づけを行い、開催したいと考えます。

まず大会前日の卒後教育セミナーにおいて、理事長の上田先生より、若手心臓血管外科医に向けて「これからの心臓血管外科を考える」と題してご講演いただきます。25日からは招請講演、教育講演、シンポジウム、パネルディスカッションと多彩なプログラムを予定しております。特に教育講演においては、天皇陛下の手術チームのトップとして、また、この度日本人として初めてヨーロッパ心臓病学会（ESC）より金メダルを授与された自治医科大学学長の永井良三先生にハートチームに関するお話をいただく予定です。

また、特別企画として「心臓血管外科医による病院運営戦略」と題して、病院長をしている心臓血管外科医にお集まりいただき、各病院の運営戦略等についてお話をいただきます。さらに、学会最終日の午後すべての会場を使って、匠の技の手術手技をビデオシンポで発表していただき、引き続き同一テーマでのワークショップを企画いたしました。学会前日より最終日まで、よい緊張の中で学会が開催できることを願っております。

国内のみならず、海外からも心臓血管外科手術の匠の技を持った方々が一堂に会して、これから我々が目指していくべく方向性について熱い議論を戦わせていただければと考えております。ぜひ多くの方々のご参加をお願い申し上げます。

小山 信彌
（東邦大学医学部外科学講座心臓血管外科分野）

1972年　東邦大学医学部付属大森病院にて研修
1974年　東邦大学医学部外科学第一講座研究生
1985年　東邦大学医学部外科学第一講座講師
1991年　東邦大学医学部胸部心臓血管外科学講座助教授
1995年　東邦大学医学部胸部心臓血管外科学講座教授
1997年　東邦大学医学部付属大森病院副院長
2000年　東邦大学医学部付属大森病院院長
2006年　東邦大学医療センター大森病院心臓血管外科部長

趣味：犬の散歩、ゴルフ　好きな言葉：未来志向

第5回 理事会ニュース

日本胸部外科学会第5回理事会

2012年7月23日（月）13：00～16：30

一．各種委員会報告及び協議事項

（1）財務委員会

第64回学術集会収支計算書の説明と公認会計士による監査が終了したこと、今後のスケジュールが報告された。東日本大震災の会費免除の継続の件は本年度限りとすることが承認された。

（2）正会員選出委員会

専門医資格取得申請者73名（心45名、肺24名、食・その他4名）の持ち回り審議を行い、全員が合格と判定されたことが報告され承認された。

（3）会誌編集委員会

1）優秀論文賞は前年掲載原著論文36編の中から心2編、肺1編が選出されたことが報告され承認された。総会の際に授与式を行う。

2）『申請タイムテーブル「2016年申請の場合は2015年実績（2013年・2014のGTCS掲載論文が2015年に『をもつ雑誌に引用された数が重要）で申請する」を公示する。現状はAnnual Report・Review Articleの引用論文が多いこと、ガイドラインの掲載、『関連セミナーの開催（地方会・関連学会）、Editorial Board・Instructions for Authorsの検討、表紙のカラー化、Contentsメール配信サービスの導入が報告された。

3）GTCS送本中止に関して『審査では冊子体の有無は影響せず経費節減にもなるので会員アンケートを実施する。出版社との契約ページ数の増加（掲載待ち解消のため年間950頁から1100頁）、COIの掲載、和文誌Online Journalは創刊号から50年分を作成中であることが報告された。

（4）学術委員会

1）2010年学術調査結果、2005年～2009年学術調査解析は、学会誌に掲載準備中

2）2011年調査回収状況

3）マスコミ各社からの問い合わせについて報告された。8月中に未回答施設に再度連絡を行う予定である。

（5）倫理・安全管理委員会

会員3名の倫理に関する件は役員辞任などの処分を検討し承認された。鑑定医リストの更新は名誉・特別・評議員を対象とすることが提案され承認された。

施設からの手術検証のため外部委員を推薦し報告書を監修、公共機関からの手術検証の再依頼については鑑定医を推薦、過去に策定した倫理規範および勧告を現状に則し改訂したことが報告された。

（6）専門医制度委員会

1）心臓血管外科専門医認定機構報告（2014年3月31日までを認定期間とする心臓血管外科専門医は外科専門医との都合上更新時期を早める、2012年 AATS Mitral Conclave Workshopのセミナー受講は可、修練登録開始を明確化）

2）呼吸器外科専門医合同委員会（NCDとの関連、専門医新規申請における手術内容の見直し、合同学術調査の経費負担、呼吸器外科専門医と外科学会資格）

3）食道外科専門医認定に関するスケジュール

4）専門医のあり方に関する検討会（総合医の見解が医師会と厚生労働省は違う）について報告された。

（7）研究・教育委員会

卒後教育セミナープログラム、胸部外科若手育成ワーキング、学会主導の臨床研究が報告された。サマースクールの今後の運営方法などについて審議し、日本呼吸器外科学会及び日本心臓血管外科学会の教育委員会と連携し開催する。

（8）診療問題委員会

手術委員会による手術時間の実態調査、実務委員会による緊急要望項目、平成25年より分担金の値上げが報告された。

（9）総務・渉外委員会

医師賠償責任保険、職員給与、永年勤続の表彰を検討している。

（10）広報（Homepage・Internet）委員会

バナー広告に関して医療に関連した業種に限定するか検討したが限定せず掲載することが承認された。ホームページデザイン・ツリー見直しはSTSなどを参考に次回理事会までにリニューアル（案）および予算を提示する。

（11）臓器移植委員会

施設別心臓移植数及び心臓移植の成績、年度別肺移植症例数・施設別肺移植症例数及び肺移植生存率が報告された。

（12）処遇改善委員会

第65回定期学術集会の際に特別企画として「医師の処遇改善」を行う。

（13）COI委員会

英文COI指針・運用規則・様式を作成しホームページへ掲載した。

（14）委員交代の件

役員などの辞任に伴い委員の交代を検討し承認された。

（15）名誉理事長・名誉会長・名誉会員・特別会員推薦の件

本年度は名誉理事長・名誉会長1名、名誉会員5名、特別会員6名を推薦する。

（16）役員立候補案内

今回の理事改選数は心臓4名、肺3名、食1名である。

（17）日本心臓血管外科手術データベース機構への分担金支払いの件

データベース機構から2011年度決算・2012年予算資料が提出され、本会の2012年分担金について承認された。

二．第65回定期学術集会

会場使用計画、定期学術集会収支計予算書、日本語版ポケットプログラムの作成が報告された。

三．その他

（1）新医療機器使用要件等基準作成事業

厚生労働省医薬食品局長宛て新医療機器使用要件等基準作成事業（コンテグラフ）を提出する。

（2）日本医学会の組織運営に関する構想について

役員で持ち回り審議をする。

（3）生体内圧力の計量単位について

役員での持ち回り審議結果を日本医学会会長宛てに回答した。

（4）専門認定呼称の改編の件

呼吸療法専門臨床工学技士を呼吸治療専門臨床工学技士に改編の決定及び講習会の講演名義使用は承諾する。

日本胸部外科女性医師の会（WTS in Japan）

日本胸部外科女性医師の会（WTS in Japan）は今年で7回目の集会を無事終えることができました。会の発端は、2002年に自身が初めてSociety of Thoracic Surgeonsの定期学術集会（Fort Lauderdale, Florida）へ参加した際に、Women in Thoracic Surgery（WTS）という集会の存在を知ったことにさかのぼります。その後多くの方のご協力を頂きながら第59回日本胸部外科学会定期学術集会（2006年、東京）に併設して第1回目の日本胸部外科女性医師の会（WTS in Japan）を開催して以来現在に至っております。今年は藤田博正先生（第65回日本胸部外科学会定期学術集会大会長）の多大なお計らいの下で、向井千秋先生を講師としてお迎えし大変な賑わいを見せることができました。講演の概要は、女性が働くこと、御兄弟の御病気を通じて医師になることを決意されたこと、大学生時代および医師としてのキャリアを形成する際に、性別・職種・人種を問わず協力し仕事を達成することの重要さなどについて深くお考えになられたことなどの経験談も踏まえたお話を伺うことができました。また昼食を摂りながら講師を含む参加者同士が非常に近距離での議論を重ねることもできました。参加者は向井千秋先生、藤田博正先生、女性胸部外科医16名の他に男性胸部外科医師4名を含む総勢30名余りと比較的大きな会になりました。WTS in Japanでの、場合によっては一期一会といっても過言ではないようなこの会での出会いを通じて、お互いの経験を共有し一人でも多くの方が楽しく胸部外科医を続けていくための肥やしにしていただけるよう、今後もWTS in Japanの開催継続についてお手伝いできればと考えております。

齋藤 綾（前列左から4番目）
（東京大学医学部附属病院心臓外科）

1994年　医学部卒業、同大学病院にて臨床研修
1996年　同大学第一外科入局
2001年　東京大学医学部附属病院心臓外科入局。
2007年　東京大学大学院医学系研究科卒業、心臓外科・助教を経て2年間カナダへ心臓移植フェローとして留学。
現在特任講師として東京大学医学部附属病院在籍。

趣味：映画（ジャンルは問わず）、旅、車。
好きな言葉：情熱

2012年度 日本胸部外科学会 優秀論文賞 受賞者の声

優秀論文賞を受賞して① 福井 寿啓

Graft selection in elderly patients undergoing coronary artery bypass grafting

この度は、私の論文に対しまして日本胸部外科学会優秀論文賞を受賞させていただき、誠に身に余る光栄と存じます。

本論文は、75歳以上の高齢者に対する冠動脈バイパス術の成績を75歳未満の若年患者と比較検討した臨床研究です。近年、患者の高齢化が進み、ますます高齢者のバイパス患者の比率が増えてくるものと予想されます。この中で、高齢者の成績を若年者と比較することは今後の治療方針を決定する上で有意義であると考え、発表することといたしました。結果としては高齢者でも若年者同様の短期および中期遠隔成績を得ることは可能であり、両側内胸動脈を使用することが良好な成績に寄与する可能性があることを示すことが出来ました。

胸部外科医は患者管理や手術などの日々の仕事以外にも常に勉強し、研究を発表し、討論会に参加することが重要と考えています。また、苦心して書いた論文が採用され、雑誌に掲載されたときの喜びは忘れがたい感慨です。今後も一層努力し、学会や雑誌に採用していただけるよう努力していく所存です。また、後進の指導にも励んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、推薦していただきました座長の先生方、会誌編集委員および選考委員の先生方、日本胸部外科学会会員の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

福井 寿啓
（榊原記念病院心臓血管外科）

1994年3月　和歌山県立医科大学卒業
1994年4月　大阪市立大学第2外科入局
1997年4月　大阪市立総合医療センター心臓血管外科
2000年4月　ベルランド病院心臓血管外科
2002年5月　新東京病院心臓血管外科
2005年4月　Indiana大学心臓外科Visiting fellow
2005年8月　大阪市立大学心臓血管外科
2007年4月　現職

趣味：音楽、読書　好きな言葉：克己

優秀論文賞を受賞して③ 藏澄 宏之

Validation of the JapanSCORE versus the logistic EuroSCORE for predicting operative mortality of cardiovascular surgery in Yamaguchi University Hospital

この度は栄えある日本胸部外科学会 優秀論文賞を賜り、身に余る光栄に存じております。今回の受賞論文の要旨と我々の施設について紹介させて頂きます。

JapanSCOREの有用性を示した論文

手術リスクモデルは、患者さんの術前状態をもとに在院死や合併症などの発生率を算出する計算式です。手術適応の決定、患者さんへの病状説明、手術成績の評価など役に立ち、優秀なリスクモデルの存在は外科治療成績の向上に寄与すると考えられています。本論文は、山口大学第一外科で行われた523例の開心術を対象とし、JapanSCORE と logistic EuroSCORE、二つのリスクモデルの在院死予測精度の違いを検討した論文です。

日本の心臓外科の先生方は、logistic EuroSCOREによって算出される在院死の発生リスクは、実際の値よりも高く算出されるという印象をお持ちであったと思います。一方で、JapanSCOREで算出される在院死の発生リスクは、我々の臨床に則した値が算出されると感じられます。例えば、「術前合併症を持たない小柄な80歳のASの女性患者に対するAVR」が、logistic EuroSCOREでは在院死7・9％と算出されるのに対して、JapanSCOREでは2・0％と算出されます。

我々の統計学的検討では、JapanSCORE の予測精度は logistic EuroSCOREと比べて、「有意に良好」または、「良好な傾向がある」という結果が得られました。

JapanSCORE と logistic EuroSCOREの予測精度の違いを統計学的に比較し、JapanSCOREの有用性を論理的に示した論文は、我々の知る限りではこの論文が最初であり、そのことが今回の受賞につながったと考えています。

山口大学第一外科について

我々の山口大学　第一外科で年間に行われる開心術は130～150例程度です。当科の特徴としては、心血管の再生医療に世界に先駆けて取り組んできたことが挙げられます。地方大学ですので都心部の施設と比べると、集まる症例数には限界がありますが、患者さん一人一人に即した最良の心臓外科治療を提供できるようにスタッフ一同、日々精進しています。今後も我々の施設から全国へ、そして世界に情報を発信し、日本の胸部外科の発展に少しでも貢献できればと考えています。最後に、私のような若輩者がこのような立派な賞を受賞できたのも、濱野公一教授、美甘章仁准教授をはじめとする山口大学第一外科の諸先輩方の御指導の賜物と感謝申し上げる次第です。この度は誠にありがとうございました。

藏澄 宏之
（山口大学大学院 器官病態外科学〔第一外科〕）

2003年　山口大学医学部卒業
2007年　山口県済生会下関総合病院　心臓血管外科
2008年　山口大学医学部附属病院　第一外科
　　現在に至る

趣味：音楽鑑賞
好きな言葉：朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり

優秀論文賞を受賞して② 野尻 崇

Efficacy of low-dose landiolol, an ultrashort-acting β-blocker, on postoperative atrial fibrillation in patients undergoing pulmonary resection for lung cancer

この度は、日本胸部外科学会の優秀論文賞の栄誉にあずかり、大変光栄に存じます。

私は呼吸器外科医になって最初に興味を持ったのが、〝肺癌術後心房細動〟でした。なぜこのようなことが起きるのか、その clinical question を解決する為に最初に行った臨床研究は、術前BNP値や術前左室拡張障害の指標を用いた肺癌術後心房細動の発生予測であり、続いて発生予防として周術期ヒト心房性ナトリウム利尿ペプチド（hANP）を用いた無作為化比較試験を実施致しました。これらの経験を踏まえ、今回肺癌術後心房細動に対する低用量塩酸ランジオロールの有用性についての報告を行うことができました。これら一連の研究は、全て国立病院機構刀根山病院で実施しており、今回の優秀論文も、当院では私で3人目の受賞となります。常に高い問題意識を持ち、clinical question を解決していこうとする姿勢を当施設で学べたことは、これからの外科医人生において大きな糧となったと感じております。この場を借りて、前田部長をはじめ、ご指導頂いた諸先輩方へ厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

本論文の臨床的意義

ランジオロールは、β1選択性の極めて高いβ遮断薬であり、従来のβ遮断薬と異なり、副作用の心配が少なく、安全に使用することができる優れた薬剤です。これまでに心臓外科領域より、低用量ランジオロールの有用性についての報告があり、我々呼吸器外科領域でも検証した次第です。結果、肺癌術後心房細動に対して、従来治療（ジゴキシン＋ベラパミル）と比較して、心拍数のコントロールと sinus conversion（洞調律へ戻す）について良好な成績が得られました。

術後心房細動は早期離床の妨げとなり、他の合併症の併発につながる報告があります。ただの不整脈と放置せず、積極的に安全に治療できる方法を知っておくことは、周術期管理の幅を広げることにつながるのではないかと考えています。

野尻 崇
（国立病院機構刀根山病院呼吸器外科（現大阪大学呼吸器外科））

2001年　和歌山県立医科大学卒業、大阪大学第一外科研修医
2002年　国立呉医療センター・中国がんセンター外科　レジデント
2004年　大阪府立急性期総合医療センター心臓血管外科　レジデント
2005年　大阪厚生年金病院心臓血管外科　医員
2006年　国立病院機構刀根山病院呼吸器外科　医員
2009年　大阪大学大学院医学系研究科呼吸器外科 シニア医員
2010年　国立循環器病研究センター研究所生化学部流動研究員（兼務）

趣味：研究、ジョギング、水泳　好きな言葉：努力

編集後記

今回の「胸部外科今昔」は、食道外科で名誉会長の内田雄三先生にご執筆戴きました。その中で、先生は今上天皇の冠動脈バイパス手術成功に象徴される「今」の成果の中、遠い「昔」に何かの忘れ物をしたように感じたと述べられています。記憶の彼方、30年以上前の「研究室の窓」に先生がご覧になったものは、専門領域を越えて実験に勤しむ若い研究者の笑い声でした。「ある研究室の窓から」の副題が付けられた玉稿は、心、肺、食道の三本柱が協働する胸部外科学会の原点をお示し頂いたものと思いました。

第7回日本胸部外科女性医師の会が、本年度胸部外科学会総会で開催されました。胸部外科医の処遇改善が求められている中、女性医師が働きやすい環境づくりが全体の処遇改善に繋がるものと考えられます。

第43回日本心臓血管外科学会学術総会（東邦大学　小山信彌教授）のテーマは「新・匠の時代」です。まさに知覚し、思考する心臓血管外科医でなければ、新しいものを創出できません。

本年度の優秀論文賞受賞者3名は、いずれ劣らぬ素晴らしい仕事をされています。若い会員の先生方！　是非とも GTCS に投稿されて優秀論文賞を獲得してください。

坂田理事長が新年の挨拶に示されたように本学会の最重要課題であるGTCSの〒獲得に向け、学会挙げて努力しましょう。

広報委員会副委員長
角 秀秋
（福岡市立こども病院心臓血管外科　副院長）

1977年　九州大学卒

趣味：映画鑑賞
好きな言葉：鬼手仏心

17 JATS NEWSLETTER No.17
JUST NOW JATS
2013年1月10日発行

発行◉特定非営利活動法人 日本胸部外科学会
〒112-0004 東京都文京区後楽 2-3-27 テラル後楽ビル 1F
TEL◉03-3812-4253　FAX◉03-3816-4560
URL◉http://www.jpats.org/

編集◉日本胸部外科学会 広報委員会
E-mail◉jats-adm@umin.ac.jp

デザイン・制作◉株式会社 杏林舎

本誌掲載記事、写真等の無断複写・複製・転載を固く禁じます。©The Japanese Association for Thoracic Surgery